

江戸時代における被服規制

——信濃国川中島地方について——

林 千 穂

1 はじめに

私は、さきに信濃国伊那、佐久両地方の江戸時代における被服規制について発表した¹⁾²⁾、本稿は引き続き川中島地方についてのそれを考察しようとするものである。

被服規制は、江戸時代という封建社会において階級識別の表示を主な目的として四民すべてにわたり行なわれたが、とくに年貢完納を第一とする農民に対しては儉約令の一環として、衣生活の奢侈化を禁止する目的も持ち、具体的で厳しいものとなっている。

規制は基本的には幕法を遵守しているが、諸藩の実情に応じて布告され藩それぞれの特徴がみられる。従って被服規制の内容を知ることにより、いつ頃どの地域でそれらが着用・使用されていたかが推測され、とくに「キモノ」の成立が江戸時代にあることからその材質や織り方・染色・着装法などの変遷を知ることができる。

本稿では伊那・佐久地方と同様に主に農民層への規制の考察を中心としたが、川中島地方は信濃国を領有した大名のうち、最も石高の大きい松代藩を含むため当藩については士階層の被服規制についてもふれた。

2 川中島地方について

川中島地方は長野県の北部に位置し、千曲川流域に沿った広い盆地であるが、江戸時代には大名の参勤交代や佐渡金山の金銀輸送等で賑わった北

国街道をはじめ、その脇道である北国脇街道や、「信心の道³⁾」と言われる北国西街道等多くの街道を通じ、人々や物資の交流が盛んに行なわれた。中でも善光寺の門前町である善光寺町では古くから市が開かれ、市で扱う商品の中で木綿布は善光寺町の名産として特に有名であった⁴⁾。また善光寺に隣接する松代では寛文4年(1664)に市が開設され、主として木綿が取引きされている⁵⁾。また養蚕も文化期頃から盛んになり、松代紬は上田紬と並んで信濃国の代表的な織物として有名であった⁶⁾。

所領関係は松代藩、飯山藩、須坂藩の3藩と椎谷藩(越後の藩であるが中期以後上水内・上下高井郡内5千石を領有)および善光寺領、戸隠山神領、天領・旗本領によって領地支配が行なわれた。

3 被服規制の具体的内容

江戸時代を前稿と同様に慶長～貞享までを前期、元禄～安永までを中期、天明～幕末までを後期と区分し、着る物を中心にその他の付属品として被り物・履き物・髪飾り・傘類についての考察を行った。

(1) 前期

松代藩から延宝4年(1676)に在中法度が出されている⁷⁾。

一 衣類之儀木綿を可用、絹・紬より以上不可着之、帷子ハ地布を可着、

百姓には絹・紬は許されていない。伊那地方の

幕府領伊久間村ではこれより3年前に出された触では、名主とその妻子には絹・紬の着用許可が明記されているが、松代藩ではとくに名主への絹・紬着用許可の記述はない。百姓の中に名主を含むとすれば、松代藩では名主であっても絹・紬は禁止されていることになる。

これより7年後の天和3年(1683)に旗本の板倉領から次の覚が出されている⁹⁾。

一 百姓衣類紬木綿布之外不可着之

注目すべきは百姓に紬が許されていることである。百姓への紬着用許可は金沢藩の寛永7年(1630)の「百姓之きる物之事、布・木綿たるべし、但 百姓之女は紬之着物迄は不苦⁹⁾」や盛岡藩の元禄16年(1703)の百姓に対する「紬・木綿可着用之¹⁰⁾」等藩独自にはみられるが、旗本領では珍らしいのではないだろうか。

以上前期については、調査した範囲内では伊那・佐久地方と同様被服に関する規制は大変少ない。また規制の内容も衣服の材質のみで織り方や染色に関するものは見当たらなかった。

(2) 中期

中期における最初の被服規制としては、元禄15年(1702)に幕府領の高井郡北大熊村の五人組帳¹¹⁾がある。

一 衣類之儀跡々被 仰出候通り毛織絹布びらうど表裏帯等に茂仕間敷候、名主者妻子共に絹紬木綿、脇百姓者布木綿之外不可着事、尤名主脇百姓共に衣類紫紅葉桜染申間敷候、惣而廉相致可着事

毛織やびらうどなど伊那・佐久地方では見当たらなかった織物が規制の対象になっている。毛織物やびらうどは当時輸入品で高級な織物であったが、幕府では寛文8年(1668)に町人に対して毛織の羽織を禁止している(『御触書寛保集成』1057号)。びらうどの製織については慶安年間(1648～61)に京都で初めて行なわれたとされている¹²⁾。

染色に関しては名主や脇百姓に対して紫や紅葉・桜染を禁止している。幕府ではこれより約60

年前の寛永20年(1643)に、名主・百姓およびその妻子に対して紫と紅梅染を禁止している(『徳川禁令考』2786号)。いずれもこれらの染色が高価であったためと考えられる。

これより10年後の正徳2年(1712)に飯山藩から次の覚が¹³⁾出されている。

一 衣類之儀庄屋身上宜敷ものニ至迄絹紬布木綿之類着し、其外之百姓ハ木綿布類之外堅着しへからず、妻子も同然たるへし 但 出家禪門医者之儀ハ有合候衣類心次第たる可事 庄屋と「身上宜敷もの」には絹・紬が許され、その他の一般百姓には木綿と麻しか許されていない。「出家禪門」と「医者」についての規制は緩く、これは伊那地方と同様である。

寛延3年(1750)に幕府領高井郡小布施村等13か村から儉約申合が出ている¹⁴⁾。

一 近年染物殊之外高銭を出し候義不宜候、向後表染帋反ニ付染賃銭五拾文ノ百文を限ニ染可申候

表地の染代を制限し浪費を防止しようとしている。これより9年後に幕府領高井郡壁田村に出された御触でも染色に関する規制があるが、寛文8年(1668)の幕府令とはほぼ同文であり90年経てなと同じ規制が繰り返されている。

士階層における被服規制として松代藩から宝暦13年(1768)に触が出されている¹⁵⁾。表1はそれをまとめたものである。

織物の種類より材質に関するものがほとんどで大変質素であることがうかがわれる。松代藩は初期には富裕であったが、たび重なる幕府の普請助役や寛保2年の千曲川大水害等により財政が窮迫し、財政建直しをはかる改革がたびたび行なわれているが¹⁶⁾、それらの影響も大きいと考えられる。

以上中期における被服規制は、前期と同様着物の材質に対するものが多く、全般的に質素な衣生活であったことが推測される。また毛織や天鵝絨等の織物類や紅葉・桜染など具体的な色や、染めの価格制限など伊那・佐久地方にはない特徴がみ

江戸時代における被服規制

表1 士階層に対する規制——松代藩(宝暦13年)

対 象	内 容
給人以上	衣服は絹・紬・木綿 羽織・袴は衣服に准す 火事羽織等は有合 拝領の紋附・拝領でない紋附 妻子同様
給人以下	衣類は木綿、妻子も同様
召使男女	衣類・帯は木綿の外一切停止 帷子は地布 縫入の模様 女腰帯に絹・紬
そ の 他	婚礼の節の夜具は絹・紬・木綿まで

注) ゴジックは禁止のもの

られた。

(3) 後期

後期は前・中期に比べ規制頻度が多く、その理

由としてたび重なる災害(千曲川の洪水・冷害・地震等)により財政が困難となり、倹約の必要性が増したことが、また諸産業の発達により生活が向上し奢侈化を防止する必要性が生じたことなどが考えられる。

天明3年(1783)に出された松代藩岩草村の倹約令¹⁾には

一 男女共に伽羅之油無用呉服之儀無紋にて浅黄鼠色染めに限り相用い、羽織相成らず、女わけ紋前之外散らし附相成らず、手前拵え嶋之外無用、男女共に足袋無用、勿論持参候飾服之内紋附・散らし附流れ等にては致候分は苦しからず、染返しにては無用之事

とあり、新しい規制として紋付や羽織・足袋に関するものがみられる。紋付着用については小諸藩でも安永期にみられ、松代・小諸両藩の地域で

表2 染めに関する規制(中期および後期)

領地 年号	松 代 藩	須 坂 藩	椎 谷 藩	幕 府 領
寛延3年 (1750)				表染壹反ニ付 五拾文より百文まで
宝暦9年 (1759)				庄屋・百姓共 紫・紅染、形なし
天明3年 (1783)	呉服之儀無紋にて 浅黄・鼠色染めに限り			
寛政12年 (1800)	衣類并帯 手染同様ニ仕			
文化11年 (1814)	男女衣服染返之義 青染	染色代男女共 下直に誂ひ		
文政5年 (1822)	有来りの紋付用いる場合 紋消しを用いる			
文政9年 (1826)	着物之義綿布 安染			
天保13年 (1842)			百姓衣類 目立つ染色	はで成縞模様
元治元年 (1864)				穢多・非人は 紺染
慶応3年 (1867)	衣服之義 薄染			

注) ゴジックは禁止のもの

表3 羽織の規制

領地 年号	松 代 藩	須 坂 藩	飯 山 藩	幕 府 領
文化元年 (1804)		婚礼之義 上下御免無之もの 袴・羽織たるべし		
文化11年 (1814)	男女子供に至迄 羽織	年始五節句其外吉凶共 単羽織之義麻・木綿仕 立、是まで有合古絹 羽織相用追々麻・木綿に 相改可申 羽織着用之義享主分ハ格 別、麻・木綿に限り 若もの常に無用		
天保12年 (1841)	男女 羽織裏糸打紬等は是まで有 来は3ヶ年の間相用度奉 存候			
天保13年 (1842)				百姓衣類之義 羽織 祝儀・不祝儀共 麻羽織
嘉永7年 (1854)			年始之節 村内役人外すべて羽折 斗着用 不幸之節 羽折可限	
元治元年 (1864)				穢多・非人は羽織

注) ゴジックは禁止のもの

は安永～天明期に紋付の着物が農民層まで広まってきたことがうかがわれる。興味深いのは同じ紋付でも婚礼時に持参したものは良しとしている点である。従って紋付の着用そのものを禁止しているわけではなく、新たに染めることによる浪費を規制したものと考えられる。また染色については、浅黄か鼠色に限られている。染めに関する規制は他藩にもみられ表2は中期と後期の染めの規制についてまとめたものである。

表2にみられるように農民層は青染・浅黄・鼠色など安くて地味な染色は許されているが、派手で目立つ高価な染色は禁止されている。表3は幕

末までの羽織の規制をまとめたものである。

幕府領では一貫して羽織を禁止しているが、須坂藩・飯山藩では婚礼や年始・五節句その他吉凶時には許している。松代藩では文化11年の規制では羽織の着用を全く禁止しているが、天保12年には羽織裏に紬の使用を許していることから着用が許されていることが察せられる。このように初めは禁止されていた羽織が次第にその着用を許されていったのはその普及があまりに目ざましく¹⁸⁾、種類も用途に応じ多様であったため規制しきれなかったのではないかと推測される。

足袋については松代藩では寛政12年(1800)にさ

江戸時代における被服規制

表4 傘類の規制

領地 年号	松代藩	須坂藩	飯山藩	幕府領
天明7年 (1787)	日傘			
文化元年 (1804)		男女共 蛇之目傘・青傘		
文化11年 (1814)	塗傘	青傘・蛇目傘		
天保5年 (1834)		蛇目傘 男女共重き吉凶之節は龜 末の洩蛇目傘		
天保12年 (1841)	格別目立候日傘			蛇目傘
天保13年 (1842)				雨傘・日傘
嘉永3年 (1850)				日傘
嘉永6年 (1853)				蛇ノ目・日傘 村役人は傘これまで通り
嘉永7年 (1854)			日傘	傘
元治元年 (1864)				日傘
慶応3年 (1867)				新規之傘

注) ゴジックは禁止のもの

らし足袋を、幕府領では天保13年(1842)と嘉永7年(1854)に足袋の規制がみられるが、慶応3年(1867)には幕府領では婚礼・祝儀・仏事の時には着用を許している。幕府領では単に足袋と表現され、それが白足袋のみ指すのか色足袋も含むのか解らないが吉凶時に許可していることから推測すると、白足袋を指しているものと考えられる。

天明7年(1787)に松代藩から倭約令が出されている¹⁹⁾。

一 衣服之事

右は大小御百姓他所付合候絹布一切相用申間敷候、夏地布冬木綿ニ相限り可申候、妻子共右ニ准シ可申候、右之外日傘類相用申間敷候

御事

とあり、大百姓であっても絹布類を禁止している。天明期は天明2年より始まった冷害による凶作で全国的に飢饉にみまわれ、各地で農民一揆が起っているが、天明7年(1787)に中野陣屋配下で百姓が蜂起したとき、松代藩でもその鎮圧のため兵率150人を派遣している²⁰⁾。こういった事情の中で倭約がより強化されたものと考えられる。

日傘の禁止については表4にまとめた。

日傘は幕府では享保3年(1803)に最初の規制をし、以後幕末まで数回規制しているが松代藩では調査した範囲内では日傘の禁止は天保12年(1841)までで、以後は規制の対象としていない。

表5 履き物の規制

領 地	松 代 藩	須 坂 藩	幕 府 領
年 号			
寛政元年 (1800)	雪踏皮緒の下駄		
文化元年 (1804)		塗下駄・糸皮の鼻緒 裏付雪駄・駒下駄	
文化11年 (1814)	皮緒の履物		
天保5年 (1834)		塗下駄・糸皮の鼻緒裏付雪 駄 皮鼻緒の雪駄	
天保13年 (1842)			天鷲絨を履物 雪下駄・塗下駄
嘉永3年 (1850)			雪駄・麻裏草履
嘉永6年 (1853)			塗下駄・足駄 鼻緒は竹の皮
嘉永7年 (1854)			皮の手下駄・せった
慶応3年 (1867)			新規の皮をの塗下駄

注) ゴジックは禁止のもの

一方幕府領では天保12年(1841)以降幕末まで頻繁に規制しているが、嘉永6年(1853)には村役人には許している。須坂藩では天保5年(1834)には「重き吉凶」時には粗末な渋塗りの蛇之目傘は許している。日傘も蛇之目傘も、従来日よけ用として用いられてきた菅笠や雨よけ用の蓑笠に比べれば、はるかに機能的で便利なものであるが高価な物ということで禁止されたものと考えられる。

寛政2年(1790)に須坂藩から触れが出されている²¹⁾。

一 近年別而町在共ニ惣而身之廻り笠・はきものは分限不相応花美ニ相見、古きを失ひ不宣事ニ候、中以上頭立上下着用之者家内は吉凶共絁絹ニ限り、中以上之町人百姓は木綿之外さや・縮緬之帯ニ而茂相用申間敷候

笠や履き物が華美になってきたとしている。笠については松代藩で享保2年(1802)にふせ笠を、また幕府領で天保12年(1841)に冠笠、天保13年(1842)に竹張笠を規制している。また履き物の規制については表5にまとめた。

松代藩では寛政元年に雪踏と皮緒の下駄を禁止しているだけで、以後は履物類は規制の対象としていない。一方幕府領は幕末まで頻繁に規制している。幕府では寛延3年(1750)に町人に対して三枚重ねの草履・塗下駄を禁じている(『御触書宝曆集成』876号)。それより46年後の文化元年(1804)に須坂藩で塗下駄及び駒下駄を禁止している。駒下駄は皮鼻緒の雪踏に歯をつけたもので正徳期(1711~15)に出たとされる²²⁾。

身分と着衣については農民層の中でも三役人の次に位置する頭立と上下着用の者及びその家内には吉凶時に絹・絁が許されているが、中以上の町人及び百姓は木綿しか許されず帯も、さや・縮緬は禁止されている。須坂藩ではこの後文化元年(1804)には女子の帯に絁を許している。以後帯には絁の禁止はみられないことから絁は許されていたと考えられる。帯については飯田藩でも着物より規制は緩く共通している。

絹布類は百姓の場合、その着用は主に吉凶時と考えられるが、表6は吉凶時における規制をまと

江戸時代における被服規制

表 6 年始・五節句・吉凶時における被服規制

領地 年号	松 代 藩	須 坂 藩	飯 山 藩	幕 府 領	善 光 寺 領
天明 7 年 (1787)	他所付合 絹布 夏地布, 冬木綿				
寛政12年 (1800)	悦事愁事 木綿・地布 絹類				
文化元年 (1804)		年始・五節句・神事・仏事 男女共木綿・麻 帯・袖口・半襟・下着・ 冠物に至るまで縮緬・ 絹・紬 婚礼の節 嫁女はかいとり 男女共に太織・紬 上下御免の者は袴・羽織 その他の者は木綿服			
文化 6 年 (1809)	他所出合 妻子・召使共 絹布 年寄検断は絹・紬勝手次第				
文政 5 年 (1822)	吉凶事其他 紋付の着物 地縞の類は木綿				
文政 6 年 (1823)					祝義・吉凶の節 男女共紬・太織 に限り 小前・店前は木綿縮
天保 3 年 (1832)	婚礼の節 嫁・聲は格別 その他は絹布, 上下 神事, 仏事 男は木綿・ 麻 女は紬・太織				
天保 4 年 (1833)		婚姻の節 当家に有合あれば嫁・聲ばかり絹・紬 その他は綿服			
天保 5 年 (1834)		年始五節句 男女共絹・ 紬・麻 帯・袖口・半襟・下着・冠物に至るまで縮緬・籠門 神事・仏事の節 男は木綿・麻 女は紬・太織・帯・袖口・半襟・下着に絹・紬はよい			
天保12年 (1841)	婚礼の節 絹布一切 平常・晴着の差別なく 木綿・麻の類に限り 但し手織の貫太織・貫紬の類はしばらくの間良い				
天保13年 (1842)	平常・晴着の差別なく木綿・麻の類に限り 但し手織の貫太織・貫紬の類はしばらくの間は良い				

嘉永6年 (1853)				婚礼の節 嫁・婿共有来 りの紬その他 は麻・木綿	
嘉永7年 (1854)			婚礼・式日 有来りの古着 類 指加太織を着 用したい時は 役人に申し出 る		

注) ゴジックは禁止のもの

めたものである。

松代藩では寛政12年(1800)には吉凶時であっても木綿と麻しか許していないが、30年後の天保3年(1832)には嫁と婿は格別とし、絹布類の着用を許している。しかし一般の参会者には絹布類は許していない。しかしさらに9年後の天保12年(1841)になると「平常・晴着の区別なく手織りの貫太織・貫紬まではしばらくの間」という条件つきであるが、許可している。従って松代藩では天保12年以降一般百姓にも平常着として貫太織・貫紬までは許されたとみられる。貫(緯)紬^{ぬき}というのは経糸に綿糸、緯糸に紬糸を用いて織ったもので、奢侈禁止に対応して考え出されたとされる²³⁾。貫(緯)太織も同様にして考え出されたと推測される。一方須坂藩は天保5年(1834)に年始・五節句の場合は男女ともに絹・紬の着用を許しているが、神事・仏事には女しか許していない。そして幕末まで一貫して平常用の着物に絹布の使用を禁止している。また飯山藩では嘉永7年(1854)の御請書に²⁴⁾、

一 衣服之義男女共都而木綿麻布ニ可限事、但是迄有来候古着類、指加太織之分、向後無他所出其外婚礼式日等ニ、取交着用いたし度儀も有之候節者、所役人共申出其者身分ニ応し候品ニ而、素の取持之古着ニ相違無之候ハ承届ケ、其段帳面ニ巨細記し可申候、譬以前より持来り候共花美之品者不申及、其者身分不相応歟又者当時身上向差支等有之候もの江者、親類五人組者勿論役人の数敷差留可申候とあり、太織の着用を男女とも婚礼式日等に許

している。しかしそれを着用するには役人に届出をし、身分相応の品であることや古着であることを明確にしなければならず、またたとえ古着であっても華美であったり身上に差し支える者は厳しく差留めとされるなど、支配者層は太織でも簡単には着用を許していない。しかしいかに厳しくしても規制が守られなかったことを示す史料として盗難届がある。天保6年(1835)に松代藩の水内郡北高田村の百姓から出されている盗難届²⁵⁾は25品目中、衣類が23品目と圧倒的に多く、当時衣類がいかに貴重品であったかが知れる。

一 黒緞細女綿入 袴 ツ
但 振袖紋扇丸ニ鷹之羽打違裏花色絹
一 白むく女綿入 袴 ツ
但 振袖
一 絹藍天鷲絨女綿入 袴 ツ
但 若松之紋裏紫絹小形付
一 白茶女綿入 袴 ツ
但 振袖紋三ツ巴裏もみ
一 同浅黄紫堅縞切 袴丈式尺程
一 同しろ茶女帯 袴 筋
一 萌黄糸錦女帯 袴 筋
一 絹黒面白昼夜女帯 袴 筋
一 黒天鷲絨女腰帶 袴 筋
一 木綿女黒合羽 袴 ツ
但 裏麻地浅黄 襟ふり黒天鷲絨
一 素袍紫浅黄堅縞女綿入 袴 ツ
但 裏木綿浅き
一 絹紺浅黄堅縞小裁綿入 袴 ツ
但 裏花色絹

一 郡内紺白かすり堅縞小立 但 裏花色絹	袴 ツ
一 同木綿紫紺白堅縞小立綿入 但 裏木綿花色	袴 ツ
一 同花色小立綿入 但 紋□□□裏浅黄	袴 ツ
一 紫縮緬女綿入 但 紋扇丸＝鷲之羽裏花色縞	袴 ツ
一 絹浅黄腰帶	袴 筋
一 □□白紺堅行女単物	袴 ツ
一 木綿浅黄小形付女単物	袴 ツ
一 麻浅き女帷子	袴 ツ
一 同白女帷子	袴 ツ
一 襦袢 但 袖口麻紋	袴 ツ
一 紫縮緬子供頭巾 縹緋・糸錦・郡内・縮緬などは絹織物であり、 婚礼時であっても農民層には許されていないこと から、被服規制がいかに有名無実化しているかが 知れる。しかし中には役人から咎を受けた例もあ る。天保8年(1837)に松代藩の喜十郎が衣類18 点、簪1本、銭3百文を盗まれたが、この中の浅 黄縮緬女物綿入と、白無垢女綿入は身分不相応だ と役人に咎められ、祖母の里方から形見にもらっ たものだと言いつて釈をした ²⁶⁾ とあり支配者層も違反 を全く見逃していたわけでないことがわかる。 先の北高田村の被害者は高級な衣類を多く持つ 有力な農民であったことが推測されるが、同じ領 内で中山新田村の農民が嘉永元年(1848)に盗難 届を出している ²⁷⁾ 。	袴 ツ
一 男向綿入もめん 但表みじん裏千草	袴 ツ
一 女向帯もめん 但浅黄堅嶋八重格子	袴 筋
一 男向古袷もめん 但表浅黄紺堅嶋裏浅黄	袴 ツ
一 男向半てんもめん 但表みじん裏2は1はの手入嶋	袴 ツ

表7 士階層(女子)に対する規制——松代藩(嘉永5年)

階 層	内 容
無役席以下 永給人格 以上	<p>搔 取 紬・太織以下鹿束之品、裾模様は 勝手次第 縫模様・裏模様・色取さし入・そ の他花美の模様 緋・紫・藤色・鶯色、袖口・裏本 紅絹</p> <p>合 着 地合染色は搔取同様、袖口・裾に 本紅絹</p> <p>上 着 地合染色は搔取と同様</p> <p>下 着 並絹以下、白無垢、下着2枚に限 り、見えないように着込んだ場合 は勝手次第</p> <p>襦 袢 袖は並絹以下、襟同断</p> <p>帷 子 男子同断、箔紋</p> <p>夏 襦 袢 袖は細練の類、襟同断</p> <p>単 袖以下</p> <p>被 衣 見合せるべき事、但し頭巾の類に 縮緬</p> <p>帯 無地八丈・呉呂・斜子の類に限 り、その他は並絹以下帯幅7寸5 分に限る舶來の品・抱帯・紅染等 の帯・腰帶・掛帯の類は並絹以下</p> <p>合 羽 木綿に限り、但し装束毛織・天鷲 絨</p> <p>髪 飾 櫛・笄・かんざし共鬘甲・黒鬘 甲・塗鬘甲等鬘甲類に紛らしい 品、唐木・象牙・銀・手重の蒔絵 附の品、但しかんざしは銀不苦、 但し1本に限り、笄ない者は2本 まで</p> <p>婚姻の節 白衣服</p> <p>葬 式 白衣服</p> <p>上着に半襟をかける事、近年袖大きく仕立候 衣服流行之処以前之通小さく仕立可申、腹当 ひも・八つ口には縮緬并織物の類一切、はき 物の緒に天鷲絨・ゆはた黒その他見事の品</p>
御徒士席 御目見席	<p>上 着 木綿・木綿太織・青梅に限り、但し 袖口・裾は下着に准す</p> <p>下 着 紬・太織・綿縮以下</p> <p>襦 袢 袖は下着に准し、襟は並絹以下</p> <p>帯 並絹以下 但し腰帶・掛帯同断</p> <p>夏襦袢 袖口に結、無地練・襟同断</p> <p>合 羽 装束も木綿類</p> <p>髪 飾 笄ない者もかんざし1本に限り、他 は給人の通り</p>

御目見以下	上 着	木綿青梅に限り
	下 着	青梅・横紬・横太織に限り
	襦 袢	袖・襟は紬・太織以下
	帷 子	襦袢冬に准し亀末の品
	帯	太織木綿にても織模様并打出し形付 ある品、腰帯・掛帯同断 他は御目見席の通り

注) ゴジックは禁止のもの

とあり、衣類の中には禁止されている絹類はなく全て木綿物となっている。同じ農民層における衣生活の格差の大きさを知る上で興味深い。調査した範囲では盗難届は天保から嘉永期にかけて集中している。

身分制度上最も上位に位置する士階層については、中期は宝暦13年に規制がみられたが、後期は幕末の嘉永5年(1852)に「儉約御定書²⁸⁾」として出されている。表7はそれらのうち女子に対するもののみをまとめたものである。

着物の材質はたとえ士階層であっても紬・太織以下となっている。また搔取の着用は無役席以上永給人以上には許されているが、それ以下は許されていない。下着の枚数や帯幅・髪飾りの本数等規制は詳細かつ具体的である。

川中島地方の紬や木綿布の生産地としての特色を反映していると考えられる規制として、文化元年(1804)に幕府領高井郡中野村の商人仲間より、紬と木綿の尺幅改の願²⁹⁾が出されている。

- 一 紬袴正 丈 五丈五尺
幅 九寸六分
- 一 木綿布袴反 丈 式丈六尺式寸
幅 九寸五分

近年尺幅猥ニ相成、無尺・無幅等多分有之候
故諸国通用愚敷……以下略

とあり、織物の寸法が守られていないため諸国で通用しにくくなっているとしている。規定の寸法(鯨尺)は現在の織物の幅とほとんど同じである。他に寸法に関する規制として文化12年(1815)に松代藩の紬商売仲間より出されたものがある³⁰⁾。

- 一 紬幅尺之儀前例敵敷相改候処猥ニ相成…中略
…向後表幅者不及申…中略…若不足之分ハ
幅壹分ニ付、五拾文宛難引可申事

松代藩では紬の織幅は幕府領より1分(約0.4cm)狭くなっている。また織幅1分不足につき50文引きにするという厳しい制裁を加えているのは、それだけ不足の反物が多かったということであろうか。天保4年(1833)に出されている松代藩更級郡下布施村の絹類取締³¹⁾によれば、「近頃万力車仕懸に而挽候もの有之右糸者機場ニ而差支…中略…是迄通手挽糸成丈上製可仕」とあり、生糸生産の増大を必要とするような産業上の変化がこの頃起っていることが察せられる。

穢多・非人層に対する被服規制は、佐久地方では小諸藩と幕府領にみられたが、当地方では松代藩と幕府領のものがある。文化12年(1815)に松代藩から出された「職方御触写穢多・非人共取締方³²⁾」によれば、

- 一 穢多非人之類、風俗百姓町人身体ニ紛候趣相聞候、以来不紛候様可致晴雨ニ不限すそをはしより、わらしをはき可申候

但 雨天之節ハ菅笠蓑用候様

- 一 着服并帯男女共木綿之外絹類一切着用不致、
譬木綿ニ而も日立不申候様之品着用可致事

とあり、穢多・非人は晴雨にかかわらず百姓や町人と区別できるよう着物の裾を折り、履き物はわらじを履けとしている。このように変った着装を強制し一目でそれと分る身分表示を要求した規制は、調査した範囲では他藩にはみられなかった。松代藩では文化12年のこの規制後さらに嘉永2年(1849)にも穢多・非人に対する取締を出している³³⁾。

- 一 晴雨ニ限らず裾をはしより草鞋をはき雨天之節ハ菅笠蓑相用可申事
- 一 女之髪草たはねニ致しびんたほを出し不申亀末之木綿之外用へからず
- 一 着類之儀者男女共ニ亀末之地布之外相用申間敷事帯同様之事

江戸時代における被服規制

表 8 髪飾りの規制

領地 年号	松 代 藩	須 坂 藩	飯 山 藩	幕 府 領	椎 谷 藩
文化元年 (1804)		女共櫛・笄・髪差に 鼈甲類, 金・銀類			
文化11年 (1814)		髪飾りに金・銀・鼈 甲類			
文政 5 年 (1822)	女髪飾の儀 鉄・真 鍮・鯨				
天保 5 年 (1834)		女共櫛・笄・髪差に 鼈甲, 朝鮮馬爪 吉凶或は人群集所へ は龜末の鼈甲・朝鮮 馬爪・飾りのない前 指沓本・銀沓本・櫛 は婚礼に限り縁女は 龜末の鼈甲・朝鮮馬 爪			
天保12年 (1841)	女の髪道具は鼈甲・ べっ甲に似た品・唐 物・金銀の笄・かん ざし・蒔絵の櫛			櫛・笄に金・銀・ 目立つ飾り細工入 組高値の品	
天保13年 (1842)	鼈甲類并金・銀細工 入髪飾			髪飾に高値の櫛・ 笄・縮緬の□□	町人髪かざり大造の 品 くし・かうかひ・髪 さしに金・細工入 組高値の鼈甲 櫛・ かうかひ・髪さし の代金百目限り, 鬘結に縮緬の色切 百姓 くし・かうかひ・ 髪さし類に金・銀・ 鼈甲に紛らわしい 品・唐木の類・黄 楊のくし・かうか ひ真鍮の髪さし
嘉永 3 年 (1850)				金・銀細工のかん ざし	
嘉永 6 年 (1853)				髪飾縮緬, 木櫛・ 笄に限り, 蒔絵形 色物	
嘉永 7 年 (1854)			女共髪飾・櫛・笄 ・簪に金・銀・鼈 甲の類		

注) ゴジックは禁止のもの

- 一 提灯之紋寸法3寸ニ限り1ツ紋ニいたし下
2寸5分程上り附可申事

この期になってもなお着物の裾を折る着装を強要している。また着物や帯の材質についても麻しか許していない。新しい規制として女の髪型と提灯の紋の寸法制限がみられる。

他藩における穢多・非人取締りの例としては弘化2年(1845)に出された幕府領のものがある³⁴⁾。これは穢多惣代の仙松が役人にあてた一札である。

- 一 私共仲間之内、身分不相応之身形仕、御百姓紛レ間違有之、已来不紛様草履打違大サ3寸4方之紋ヲ為目印等1ツ縫付、不紛様ニいたし候

- 一 履物之儀ハ草鞋并草履ニ限り、下駄・雪踏其外不相履、手傘等不差菅之小笠ヲ冠、御百姓ニ不紛様可仕事

とあり、百姓に紛らわしくないように3寸4方の草履打違の紋を目印に縫いつけると自ら申し出ている。また百姓に紛らわしくないように手傘はささないとしているが、傘については表4にみられるように幕府領では村役人しか許されていないことから、一般の百姓は規制はされてもさしていたことがうかがわれる。

当地方が寒冷地であることと関連して防寒用の被服類の規制が幾つか見受けられる。その1つとして合羽がある。天保12年(1841)の松代藩の儉約令の中で合羽装束に絹を用いることを禁止している。装束とは合羽を開閉する仕掛けのことで、木綿合羽の場合は享保年代以後は羅紗・天鷲絨類が用いられたとされる³⁵⁾が、この規制からは絹類も使用されたことがわかる。嘉永6年(1853)幕府領から出されている儉約令³⁶⁾では「木綿合羽之儀深雪之場所故寒苦を凌候ため相用」とあり、防寒用の木綿合羽は許している。他の防寒用の被服としては頭部にかぶる被り物類がある。最初の規制は松代藩の北高田村から寛政12年(1800)に出された村定の中に「頭巾絹類不相成」とあり、絹の頭巾を禁止している。また須坂藩では文化元年

(1804)の村々への申渡の中で縮緬や紬の冠物を禁止している。この冠物が具体的に何を指しているかわからない。天保12年(1841)に出された松代藩の儉約令の中では、地絹の帽子を許している。これら頭巾・冠物・帽子がどのような形のものであったか解らないが、伊那・佐久地方ではみられなかったことから当地方独特のものと推測される。

着物類以外の付属品として髪飾りに関する規制があるが、当地方では佐久地方の小諸藩に比べ約40年遅く、それらの流行が遅いことがうかがわれる。当地方で最も早いのは須坂藩である。表8に髪飾りについての規制をまとめた。

櫛や笄・簪の材質として鼈甲類や金・銀を規制しているのは伊那・佐久地方と同じであるが、新たに朝鮮馬爪や唐木・黄楊等が規制されている。また須坂藩にみられる簪の本数制限や椎谷藩の価格制限など極めて具体的に規制され、支配者層が髪飾りの奢侈化防止にいかにか懸命であったかが知れる。

4 むすび

以上、川中島地方における被服規制について文献史料を中心に考察を行なった。その結果いくつか当地方の特色をみる事ができた。まず全般的に被服内容は伊那・佐久地方に比べ質素であり、とくに信濃国最大の松代藩は士階層も含めて質素儉約が徹底していることが解った。次に農民層におけるハレ(晴)の衣服に関しては諸藩とも儀式毎・着用者毎に極めて具体的な指示がみられた。また平常着の絹類使用は松代藩では天保12年以降^{ぬき}緯紬と^{ぬき}緯太織がしばらくの間という条件つきではあるが許されているのに対して、須坂藩・飯山藩は幕末まで一貫して絹布類は禁止され、藩による違いが明らかにされた。さらに当地方が紬の生産地であることを反映して紬の織幅に関する規制がみられた。また伊那・佐久地方にみられなかった合羽・頭巾・冠り物・帽子等さまざまな防寒用衣

類が着用されていることが解った。

おわりにご指導いただいた本学の青木孝寿教授、
長野県史刊行会の古川貞雄先生に深く感謝します。

注

- 1) 林千穂：長野県短期大学紀要 38 45～51 (1983)
- 2) 林千穂：長野県短期大学紀要 40 73～83 (1985)
- 3) 小林計一郎編：郷土史事典 長野県，昌平社 119 (1979)
- 4) 前掲 郷土史事典 124
- 5) 田中誠三郎：松代の歴史，北信民報社 (1972)
- 6) 前掲 松代の歴史
- 7) 長野県史，近世史料編第7巻(一)北信地方
- 8) 覚，中野市塩野谷恒雄氏所蔵(県史刊行会写真)
- 9) 西村綏子：岡山大学教育学部研究集録
- 10) 西村綏子：岡山大学教育学部研究集録
- 11) 穂積重遠：五人組法規集 続編上，有斐閣(1944)
- 12) 後藤捷一：古書に見る近世日本の染織，大阪史談会 418 (1963)
- 13) 御法度之覚書，下水内郡豊田村伝田徳則氏所蔵(県史刊行会写真)
- 14) 小布施村等13ヶ村儉約申合：小布施町押羽区有(県史刊行会写真)
- 15) 前掲 長野県史 101
- 16) 古川貞雄：郷土歴史人物事典・長野，第一法規 46～47 (1978)
- 17) 七二会村史編さん委員会編，七二会村史 168～169 (1971)
- 18) 遠藤武：遠藤武著作集第1巻服飾編 112～116 (1985)
- 19) 儉約箇条書，長野市川中島町上布施共有(県史刊行会写真)
- 20) 長野県歴史大年表刊行会編：長野県歴史大年表上巻，郷土出版社 335 (1987)
- 21) 御触書写帳，須坂市野辺区有(県史刊行会写真)
- 22) 古事類苑，服飾部 吉川弘文館 1421 (1896)
- 23) 装道きもの学院編：きもの用語大辞典，主婦と生活社 388 (1979)
- 24) 御諸書，飯山市高橋英喜氏所蔵(県史刊行会写真)
- 25) 諸願役印書留帳，長野市北高田北条共有(県史刊行会写真)
- 26) 古牧誌編集委員会編：古牧誌，古牧誌刊行会 170 (1981)
- 27) 乍恐以書付御訴奉申上候，長野市篠ノ井有旅宮下光良氏所蔵(県史刊行会写真)
- 28) 儉約被 御出廻状并御家老中御達書，山ノ内町黒岩市兵衛氏所蔵(県史刊行会写真)
- 29) 長野県史，近世史料編第8巻(二)北信地方 681
- 30) 長野県史，近世史料編第7巻(二)北信地方 365
- 31) 長野県史，近世史料編第7巻(二)北信地方 386
- 32) 職方御触写帳多非人共取締方，埴科郡坂城町上平共有(県史刊行会写真)
- 33) 御上様より被 仰渡心得書，更埴市桑原関義真氏所蔵(県史刊行会写真)
- 34) 長野県史，近世史料編第8巻(一)北信地方 816
- 35) 前掲 遠藤武著作集 447
- 36) 御儉約被 仰付候=付奉差上御請書，木島平村計見共有(県史刊行会写真)